

---

# 鉄棒行進

mimoz.k.withberry

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鉄棒行進

### 【Nコード】

N6937Y

### 【作者名】

mimoz.k.withberry

### 【あらすじ】

災害と恋愛のものがたり。

五月四日

今日も川原で落ち込んでいる。

学校の校庭のすぐ近くを、隣の大規模な総合公園の敷地との境目になる川が流れている。川は公園を一周していて、県最大の湖と海に分かれる。水質は淡水。

数本の橋に囲まれた陸の孤島のようなその公園は学校の通学路にも指定されていて、私も橋を渡って公園を横切りまた橋を渡って学校に来ている。

青臭い雑草の上に座って川を眺めながら、先生が背中を撫でてくれている。

大丈夫。絶対に成功するから。自分の課題ときちんと向き合おう。だって。

先生にこうして相談するようになって一週間。

私は先生の期待を裏切り続けているのに。なんで私はダメなんだろう。

体育の授業。運動会の練習。

丁字に並んだ鉄棒を、右左、右左と交互に掴んで行進する。

音楽に合わせながら真っ直ぐ進んだり、くぐって交差したり、後退

したり、止まったり、また進んだり。

一歩づつは全て、鉄棒の幅に決められる。

古くからの伝統があり、毎年六年生がその演目をするのを、五年生以下は憧れの目で見える。

最後には拍手喝采のスタンディングオベーション。

六年生になる前。五年生の三月から半年間、練習と言うより訓練が始まる。

軍隊の様に指導を受ける。

他の授業では天使のように優しい先生方も、殴る蹴る怒鳴るは当たり前。竹刀や鞭の様なもので叩かれたりもする。

でも、この時ばかりはPTAも口出ししない。

私達も栄光を目指して、その訓練を必死で受ける。

体育の授業は、五年生で取って置いた半年分と六年生の一年分をこの半年に詰め込むので、ここで体操着はボロボロになるらしい。

今日も落ち込みながら家に帰る。

帰ったらお母さんに演目の進行状況を聴かれて、お姉ちゃんの時はいったった、ああだったと言われ、あなたも頑張るのよと励まされる。

五月八日

友達もそんな風に言われてると、お昼休みの話題に上った。

五月三十一日

訓練が進むに連れてだんだんとエスカレートしていく先生方の暴行。

演目の音楽やパターンは伝統の物を使うので、その頃にはもうお客様に見せられる様になっていないといけならしい。

私達も努力して付いては行くものの、なかなか上手に出来ず校舎の最上階から先生が怒鳴る。

ラインが美しくない、リズムがあっていない、全体のバランスが良くない。

お前達に本当にできるのか！  
出来ないなら演目変えるぞ！  
出来るなら最初から真面目にやれ！

他校から新任で来た先生は、それまではまあまあと言って怒鳴ったり暴行を仲裁するものの、この頃から他の先生と同様に罵倒と暴行を始める。

なんで出来ないんだ！  
お前達はダメ人間だ！  
人生の敗者だ！

でも、先生方も私達も目指す場所は一緒。

運動会の栄光。

先生方も私達の為にそうしてくれているのは分かっているから、付いていける。

内容によっては体育大学の付属中学にスカウトされたり、将来的に高校の入試にも有利に働いたり、県から表彰されたりもする。

その為に四年生くらいから転入してくる子も毎年十数人いる。逆に中学受験の為に電光していく友達も同じくらいいる。

先生方も、教育委員会か何か：よくわからないけど、良い事があるらしい。

私達の将来にも関わる重大儀式だから、頑張らなきゃ。

明日から月・水・金曜日の放課後も七時まで訓練する事になるから家族の人にきちんと伝える様にと、帰りのホームルームで言われた。その旨が書かれたお便りも配られた。

六月七日

始まる時には夜七時までと言う事だったけど、放課後訓練のある日は夜九時まで訓練。

さすがにPTAも抗議するかと思ったら、そんなに遅れているんですか？と演目の心配。

六月十五日

遅くまで居残って自主トレも始まった。

帰りが遅くなる日は公園を通るのが怖いので、同じ方向の友達と集団下校

。

それでも怖い日は先生が公園の外までついてきてくれる。

六月二十三日

今日も川原で先生が背中を撫でてくれた。

私がいちちゃんと交差出来なかったから淳君が竹刀で二十分くらい暴行を受けた。

お昼休みに淳君に謝った。淳君は、気にするなよ。俺が上手く交差出来なかったんだから。俺達、一緒に頑張ろう。

私が悪いのに。なんで私はダメなんだろう。

先生は、大丈夫。みんなで乗り越えよう。もっと自分をしっかりと持って責任感を負えば成長するんだから。ね。

夜から雨が降り始めた。

六月二十七日

雨は止まない。体育館でのトレーニングと行進練習。先生方は苛立っている。私達も苛立つ。

六月三十日

先生雨でもいいです、外で練習させて下さい。

生徒会長が一声を挙げると、一気にみんなが職員室に抗議に押し寄せる。

先生はにこにこ笑いながらお前達は仕方がない奴らだなあと言いながら腰を上げてくれる。

私達は嬉しくってわぁっと叫びながら走って校庭に出て行って鉄棒を設置する。

今日は夜十時まで訓練に夢中に励んだ。

さすがに遅くなってしまったので、公園を出る所まで先生が付いてきてくれた。

七月十日

雨だったけど気にせずに草原に座り込み、いつもの様に川原で慰められていると大きな地鳴りがした。

何が起こっているのかが分からなかった。驚いて動けなくなっている私を抱き上げて、先生は校舎に向かって走った。

酷い地震の様に地面が揺れて先生は何度も転んだ。私の腕を掴んで引き摺りまた転んで、でも手はずっと掴んでいて、また抱き上げて走って何とか校舎に転がり込んだ。



しばらく保健室で身体を乾かし、擦り傷を治療してもらい、その間先生は何度も心配して保健室を覗きに来了。

大丈夫か？テレビで今速報やってるんだけど、まだ原因がわからないみたいで…とにかくここに居るよ、ここなら大丈夫だから。すぐ戻ってくるから、ちょっと行ってくるね。

落ち着いた頃、先生に付き添われ職員室のテレビで速報を見た。

県海沖で地震が起こり、休火山だった山が地鳴りを起こし、湖に繋がっているダムが決壊し、川が氾濫。

公園はほぼ壊滅。学校周辺に多大な浸水被害が出ているらしかった。

私の自宅前の道路が陥没している様子がテレビで流れた。

先生！電話！お母さんに、電話！

震えている私はボタンを押すことも出来なくて、電話番号も頭がぐちゃぐちゃで分からなくなって、先生が急いで調べてくれた。

自宅の電話は繋がらなかった。緊急連絡先のお母さんの携帯電話も繋がらなかった。

先生は、回線が混雑しているだけだ。大丈夫だから、と言って保健室に連れていかれた。ベットに寝かされ、手を握ってくれた。

大丈夫、大丈夫だから。

私はそのまま眠ってしまった。眠る直前に、遠くで先生の声がした。ちよつと行つてくるね。すぐ戻つてくるから…

目を覚ました時、目の前に先生がいた。

目、覚めたか？大丈夫か？ と、おでこを撫でた。

うん…時計を見ると夜の八時を過ぎていた。

先生、お母さんとお姉ちゃん大丈夫かなあ。

先生は笑顔でもちろん、と頷いた。ちよつと待つて。頭を撫でながらそう言つと出ていつてしまった。

そう言えば何だか騒々しい。体育館の方からバタバタと音がするし廊下でも日中の学校よりも多くの人の声がする様だ。

緊急避難とかかな。

保健室のドアが勢いよく開く音。聞き覚えのある、お母さんの声。

お母さんは私を強く抱き締めて、良かった、目が覚めたのね。今お祖母ちゃんを体育館に運んでいたの。

一緒にいらなくてごめんね。お姉ちゃんもお父さんも無事よ。

それだけで良かった。

私はお母さんと一緒に先生にお辞儀をして家族の元に行った。

次の日の朝、職員室から運ばれたテレビで被害状況が大体見えてきた。

幸いな事に死亡者一名、重傷者は数名程度で、軽傷者が私を含めて数十人、被害は大体が浸水で、そんなに酷い災害では無いらしい。

七月十三日

家族も私も家の事が気になって仕方がなかった。

まだ住めるのかな。家の前の道路が陥没していたから、お家傾いたりしてるのかな。

大人達が口々に市長に訴えると、帰宅志願者は一時帰宅を許された。

一家につき二名までと制限がかかり、お母さんとお父さんがお家に帰った。

通帳や現金、貴金属類はお母さんが避難する時に、棚ごとバッグに詰め込んで持ってきていたから、重要な物やすぐに取りに戻らなければならぬ物は特に無かった。

何かあるかと聴かれたので、一年生になる前のクリスマスに貰った熊の縫いぐるみを頼んだ。

戻ってきたお母さんの手には縫いぐるみとお姉ちゃんの日記帳。家族の人に替え。ペットボトルとタッパ。

お父さんも大きなリュックを抱えていた。

お父さんのデジタルカメラで、家の変わり果てた姿を目にした。

二階の私とお姉ちゃんの部屋は、どうやら荒れているようだ。片付けに帰りたいなあ。

一階は窓ガラスが全て割れ、浸水した跡が残る。

なんかね、震災でお家に行けないと制限されていた間に強盗が入ったみたいなのよ。お隣もお向かいさんもそうだったみたい。酷い事する人がいるものね。家はみんなが無事に揃ってるし、通帳や保険証もあるからなんとか大丈夫そうね。でも本当に酷い事する人がいるものね。

明日香ちゃんのお家、被害にあっただって。明日香ちゃんのお母さんが帰ってきた時に泣いてた。

七月十四日

校庭で先生に会った。夜、体育館が暑くって外に出た所でたまたま出会った。

どうした？元氣か？

うん、大丈夫。先生のお家は大丈夫だったの？

お家か、この前帰ったよ。先生はマンションの三階だから、浸水とかなかったよ。荒れてたけど住めない事はないかな。明日のお昼に片付けに帰ろうと思ってるよ。

そか。

今日は十五夜だなあ。満月だ。花火大会、中止になっちゃったな。

うん。

川原の方まで行かないか？

うん。先生、抱っこして。

甘えん坊だな。ほら、おいで。

お姫様だっこしてもらった。先生が必死になって私を校舎まで連れてった時と同じように。

先生の腕と手の甲の擦り傷と、私の脇腹と肩と右のふくらはぎの擦り傷が合致した。

なんだか嬉しかった。

校庭の中場まで行くと先生は止まった。先生の胸に耳をくっつけて鼓動を聴くのに夢中だった私は止まった瞬間少し驚いて先生を見上げた。

先生は氾濫が収まりかけた川を見つめていた。川原は浸水して校庭の一部まではまだ水が漂っていた。

これ以上行くのは危険だな。

先生は私を下ろし、その場であぐらをかいだ。

先生。まだ抱っこ。

先生は黙って川を見つめていた。私はその膝に座ってまた胸に耳をくっつけて鼓動を聴いていた。

七月十五日

各地で声が上がりはじめた。

六年生の鉄棒行進の練習はしないのかという内容だった。正直、大人って何考えてるんだらうって思った。

緊急避難勧告解除。

学校は授業再開の為清掃に入った。

電気、水道、ガスは通っているらしい。

お家に帰って部屋に入ると唖然とした。地震とかのレベルじゃない部屋の荒れかた。きつと強盗にあったんだ。なくなっているものは特に無かった。

お姉ちゃんのアクリル板で出来た半透明の貯金箱と下着が棚ごとなくなっていたみたい。しばらく私の下着で我慢するーって。

私はお家に帰っちゃったけど、食糧とか来るのかな？

ダイニングのテレビと冷蔵庫はコンセントが高い所にあっただから、被害を免れたらしい。

リビングのテレビは映らなかった。テレビは低い位置にあって、画面の三分の一くらいの所まで浸水したみたいだった。

お家が壊れて住めない人達は地域のコミュニティーセーターに身を寄せた。

夜、先生から電話がきた。明日から学校を再開するとの事だった。

12時に校庭に集まれるか？通学路が遮断されてしまっているから、登校出来ないなら連絡しなさい。な。

そう言われた。

持ち物はノートと筆記用具と体操着。それだけ。

七月十六日

町内のいつもの六年生全員で、一時間半以上掛けて登校した。

先生方は笑顔で迎えてくれた。

おう、元気か！

お家帰れた？

センターから通ってるの？ノートも筆記用具も学校のあるから大丈夫だからね。

校庭に集まったのは六年生だけ。

少しゾツとした。

まさか運動会の為だけに学校再開だなんて、酷い。

スーパーもコンビニも開いてないし、食糧や物資の配給もまだ開始



されていない。

センターに散らばれば配給も僻地だと困難になったり足りなくなったりボランティアが必要になったり、大変なんだって社会の授業でやったのに。

お家が全壊して帰る場所がない人もいるのに学校から締め出してセンターに移動させて。

鉄棒を組み立てて準備に入ると、いつもの罵声が飛ぶ。

戻ってきた気がして少し嬉しかった。

七月十九日

先生にぶたれた。

淳君と私の交差の所だけ、二時間居残りで練習した。

何度もぶたれた。

淳君もかなりぶたれてた。

私のせいだ。

お家に帰るともう夜の十一時になっていた。

お母さんから聴いたけど、やっぱり食糧の配給が来ないみたい。

センターに登録して、もらいに行かなきゃいけないらしい。

お家は市街地から結構離れているから、登録したセンターにも配給が遅く届くらしい。

お母さんは食パンにカビが生えていたと怒っていた。

お祖母ちゃんはまだ自分の部屋で寝たみたい。体育館から戻ってから、家族全員で二階の私とお姉ちゃんのお部屋で寝るのが決まりになっていた。

ほら、早くお風呂入っちゃいなさい。前よりも早く学校に行く準備して家を出なくちゃいけないんだから。

余震が一日に何度も襲う。怖い。

七月二十四日

開校から毎日、朝から夜まで訓練。五年生以下の学年の授業再開の目処はたっていない。六年生の普通の授業もまだ再開していない。

今日は放課後練習が無い。

校庭の片隅で泣きながら、また先生に背中を撫でてもらっていた。

こういう日には片道一時間半の帰り道を、先生に送ってもらう。

その一時間半が特別な感じがして嬉しかった。私だけの先生。

訓練中の先生は嫌い。どの先生も怖いから嫌い。

でも今の先生は大好き。

夏の匂いと虫刺され。

明日は新しい生徒会長を決める予定日だったけど、どうなるのかな。

八月一日

今日から毎年恒例の六年生鉄棒合宿。

学校で全員で集団生活を送って行進の協調性を高める為の、お姉ちゃんいわく地獄の合宿。

無いっていう噂だったけど、本当にただの噂だったみたい。

本当は無い方が良かった。

無駄に食糧の配給を学校に回してもらうのは今はいけない事だと思う。

今だってお家に帰れない人だっているのに。うちだって、ご飯を三食満足に食べれてる訳じゃない。

家族と離れるのも嫌だ。

大人は勝手だ。

今日から四泊五日。

一日に一回でいいから、先生は優しくしてくれるかな。

ちよつと怖い。

まだ余震が何度もある。怖い。

八月六日

合宿が終わってお家に帰ってきた。

合宿中は本当に毎日怖かった。先生方は無口だった。優しい所なんてまるで無かった。

朝五時に起きて直ぐに鉄棒の設置。

五時半からストレッチ。

六時にランニング。

六時半からトレーニング。

七時から五分間の朝食。

足が遅くてランニングが時間内に終わらなくてトレーニングに間に合わなかった子は朝食抜き。

直ぐに十二時まで縦列で行進の訓練。

十二時から五分間昼食。

それからは音楽を掛けて訓練。

先生方の気が済まないと言の二時まで訓練。

夜に十分間お風呂。

続いて五分間の夜食。

就寝。

帰ってきてお母さんに泣きついたら怒鳴られた。

素晴らしい経験をさせてもらったのに何なんだった。何度も蹴られ

た。

お姉ちゃんに無言で撫でられた。

頑張らなきゃ。

八月八日

また避難勧告が発令された。

休火山の地盤が変型した為、地下水が爆発的に上ってきて湖が満水状態に。

いつ鉄砲水が街を襲ってもおかしくないらしい。

山間の谷の街で、ダムみたいになっちゃうらしい。

街を出て避難しなければいけない。

この非常事態に街は学校の周りに囲いを作ってドーム型にする工事を早急に始めている。

シェルターにして住民を守るらしい。

私達は隣街の小学校の校庭を借りて、行進の練習。

端の方で他の学年も運動会の練習を始めた。

他の学年の子達は久しぶりの再開に歓喜していた。

何がしたいのかわからない。

八月十五日

避難勧告から一週間。他の学年の子達は普通に授業を受けて、放課後と体育の授業の時だけ運動会の練習に校庭に集まってくる。

相変わらず六年生だけ校庭で行進の練習。

スゴい！頑張つて！と声援を送ってくれる。

どうか。

授業、受けないなあ。

そんな風に余所見してるから、私は怒鳴られて連帯責任だと全員で片足立ちで一時間立たされた。

三十七度の炎天下で、熱中症も続出した。

私はなんて出来ない子なんだろう。

終わってから休憩をもらえた。

みんなに謝った。土下座しながら全員に蹴られた。

その後、全員に頬をぶたれた。

淳君がよし、これで解決だ。みんなで頑張ろう。と言ってくれた。みんなも賛同してくれた。

泣きながらごめんね。ごめんね。と言うとみんなが頭を撫でてくれた。抱き締めてくれる子もいた。

その日は放課後、淳君と自主トレした。

それが終わって避難所に戻るとお母さんが夕飯のお握りを手渡してくれた。

それ食べたなら寝なさいね。明日も早いんですよ。最近あなたイキイキしてるわね。運動会近いものね。頑張るのよ！

夜校庭に出るとまた先生に会った。

また夜更かしか？ダメじゃないか。ちょっと散歩でもするか。

先生と月明かりの中散歩した。

先生、下から見上げてばかりだけど、話するときにはしゃがんで聴いてくれて、目線が合う。

ドキドキした。

八月二十七日

シエルター完成。

ご恩のある学校に別れを告げ、街に帰る。

街には二つのドームが完成していた。

緊急避難はしたけど、浸水はまだしていなかった。でも、お家に帰ることは許されなかった。

避難用のシェルターと学校のシェルター。二つの巨大な建物が、高台と川沿いの二ヶ所に設置されていた。

高台のシェルターに街のみんなが集まった。六階建てで、最上階は半分が集会場になっている。地区毎に分かれていて、場所も決められていた。

簡易的なドアや壁も作られていて、トイレやお風呂も清潔で広かった。

まあまあ満足できる様だったので、安心した。

今日から入れる家庭は入って良いらしい。住所も分かれているから、町内の仲良しの友達と一緒に探検した。

先生のお家にもお邪魔した。

私のお家は三階、先生は二階の階段の近く。

今度一人で行ってみよう。驚くかなあ。

八月三十日

学校に登校した。

明日からは他の学年の子達も登校する。



学校のドームはコンクリートの外壁に囲まれて、天窓が開くようになっていたそう。

出入り口は外周に数カ所ある外階段を上って行って、四階くらいの所に一周大きな窓がついていて、その窓を引くと何処からでも入れるようになっていた。

内側も同じ作りになっていて、一周走れるような一メートルくらいのランニングスペースまで設けられていて、数カ所ある階段を降りて学校に登校する。

シェルターから学校まで、六年生の私達の足で三十五分くらいだった。

今日は音楽に合わせたの訓練。それも朝からお昼すぎまでの四時間くらいだけだった。

校庭はアスファルトを敷いたらしく、人工芝を敷き詰めてあった。

歩きやすかった。

土じゃないから鉄棒を設置するのに少し時間が掛かったけど、先生方は怒鳴りもせず黙って見ていた。

多分、先生方も校庭が変わってどんな風になるか試してたんだろうな。

夕飯の配給の時間に、先生のお家に行ってみた。

先生、ご飯食べよ。

おう、入れ入れ。ご家族の所じゃなくていいのか？

先生は理科の先生なんだよって話してた。アナゴの研究をしてたんだって。

アナゴの研究をしてから小学校の先生になったんだって。理科の先生なんだけど、学校では国語も算数も教えるのはどうして？

わかんなかったけど、先生が楽しそうに話してたから私も楽しくなつてずーっと聴いていた。

ちよつと難しいことを喋りすぎたかな。明日から全校授業再開だぞ、早く戻つて寝なさい。

おやすみなさいっ。

階段をそつと上った。

九月四日

人工芝にも慣れて、音楽に合わせて通し練習が増えてきた。

先生方の罵声はやっぱり飛んでくるけど、暴力はあんまり振るわなくなってきたし、音楽を途中で止める事も少なくなってきた。

校舎の上から撮った動画を見て研究して意見を言い合つて指摘しあつて、何度も間違える子には先生方より先に私達で罰を与えた。

先生が持っていた竹刀も、隆司君と亮君が持って訓練に参加した。

他の学年の子達も校庭の隅で運動会の練習をしていた。こちらをチラチラ見ながら、何かを話しているのが聴こえてきそうだった。

辛そーとか何とか言ってるのかなあ。でも音楽で最後まで通し終わると、周りから歓声が湧く。

でも一番出来ていなかった子にはその場で罰を与えた。その時は誰も見ないふりをしていた。

もうすぐ本番だ。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

もうリズムも音楽も行進パートも身体に染み着いた。

後は目立たないように、行進するだけ。

九月八日

運動会まであと一週間。

重い責任がのし掛かってきているみたいだ。

どうしよう。練習も終盤を迎えて、最近は通し練習しかしていない。

先生の動画は見れば見るほどダメな子がわかってくる。

亮君。いつも列を乱してる。ほら、ここ。後退交差の所。いつもここでもたつくでしょ？亮君、ちゃんと出来てない。

隆司君が竹刀で亮君の背中を叩いた。亮君はそのまま俯せに転んで、みんなで手足を足で踏んで動けないようにして、それぞれ背中に踵落とししていった。

私達は亮君を仰向けに転がして顎を蹴り上げた。

もうそんな凡ミスしてる場合じゃないのに。亮君、偉そうに竹刀持つて指導してたくせに。全然ダメ。

でも亮君一人のせいにしたら可哀想だったから、交差するパートナ―の美咲ちゃんも罰を与える事にした。連帯責任。

美咲ちゃんはロッカーに押し込んで上からホースで水を二十分浴びせた。それから一回出して、また同じ事を三階繰り返した。もう時間がないんだから。身体で覚えてもらわなきゃ。

大ちゃんも二回目の中間交差の時に輪を乱してる。

大ちゃんは綱で足を縛って教室の梁に吊るそうとしたけど、縛るのが弱かったみたいで落ちてきた。

先生に縛り直してもらって吊るしておいた。

放課後練習を九時までやって、先生のお家に行った。

先生は居なかったけど、ご飯の配給を受け取って待っていた。十時に帰ってきて少し話して外に散歩に出掛けた。

最近先生は抱っこしてくれないけど、手を繋いでくれる。

トクベツトクベツ。

私達だけの先生。

九月十日

自信無くなりそう。練習すればするほどダメな所が見えてくる。

今日は面倒だったから手足縛って五人まとめて池に突き落とした。その後水で濡らした雑巾で鼻と口を二分間塞いだ。

その後五人は放って置いて訓練に戻った。

何度も通し練習をして、動画を見て、罰を与えて、また練習。

だんだん全員出来ていないと言う声が上がって来て、行進の左右の班に分かれて、パートナーに罰を与えあった。

淳君に首を絞められて堕ちたら頬を殴られて醒めて、また絞められてを三回くらい繰り返し返した。

私は淳君を窓際に逆立ちさせて箒で布団叩きみたいにした。窓が割れちゃって、淳君血だらけになった。

これでまた協調性が良くなるんだろうな。そうすればもっと良い行進が出来るハズだ。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

今日は十一時まで訓練して帰った。

九月十一日  
苦しい。

九月十二日

運動会の総練習。

低学年の午前中の演目から一つずつ、観戦態度、待機から演目への移動、演目の仕上がり具合、終了後の移動。

全てに置いて、六年生は模範でなければならない。

先生方にすごく怒られた。

総練習が終わってから校庭に並べた椅子に座らされ、二時間怒鳴られ続けた。

観戦態度、声援の送り方、盛り上げ方、旗の振り方、笑顔、ハイタッチ。

今の私達には不必要な練習だと思ったけど、そんな事を言ったり手を抜けば先生に連れてかれる。

こんな時に連れてかれて訓練が出来ないのは利益的じゃない、と淳君が耳打ちしてきた。

利益的ってどういう意味がよくわからなかったけど、何と無くその練習に本気で取り組んでるんだって姿勢を見せなきゃいけないんだと思って大声で声援の練習をした。

それが終わったのは夜の八時。

ドームには球場とかのライトみたいなのが設置されていたから、時

間なんて関係なかった。

それから行進の訓練が始まった。

久しぶりに先生方から指導を受けた。

友達が扱う竹刀よりもずっと痛く叩かれた。右足首が切れて腫れ上がったけど、それよりも訓練の方がずっと大事だ。

パートナーの淳君とも協調性が取れて、失敗はしなくなった。

やっと完成してきた。ここまでやったんだから、先輩達やお姉ちゃんに負けない評価をされたい。

本番は、色んな人がくるらしい。

市町村合併で郡と言う名前をつけられた伝統的な集落が集まったこの田舎街に、県長、県議会議員、町長や町議会議員、各体育会系大学のスカウト、学区の高校の先生、学校のOB…

一昨日から食事を受け付けないくらい。

緊張で手が震えて足がしまう。

夜の二時まで訓練を続けた。

九月十三日

三時前に避難用のシエルターに着いて解散した。



疲れてそのまま眠ってしまったんだけど、午前四時二十二分大きな地震が起こった。

お父さんとお母さんとお姉ちゃんとお祖母ちゃん。身を寄せあつて地震が終わるのを待った。

お父さんが一番上になって毛布を被って守ってくれた。

地震が終わるとざわざわと声が聴こえてきて、ドアを開けると町内会長のおじさんが大丈夫か！と声を掛けてきた。

私は驚きと恐怖で動けなくなつて、手が震えて硬直状態。

医務室に担ぎ込まれてベッドに寝かされた。せんせい、せんせい、せんせい、と呟いていたみたいで、十分くらいで忙しい中先生が飛んできてくれた。

大丈夫か？

そう言つておでこを撫でると、すぐ戻るから！と言つて走つていつてしまった。

身体が動かなかつたけど、お父さんに抱っこされてお母さんに頭を撫でられてた。

どっちだろう？

場内を走り回る音なのか、本当に鉄砲水がきた音なのか。振動も続いている。

ドアを開け放つように町内会長さんが言って回ってるみたい。

ドドドツツという音と振動で廊下を転がってくる人がいたり、館内放送が絶え間なく流れる。

浸水するはずのない床が薄ら湿っているようだった。少し異臭…汚臭がする…

ずっと揺れてて気持ち悪くなってちょっと吐こうと思ってトイレに行ってわかった。

下水が逆流してきてるんだ。

元々水洗ではあったけど、シエルターの外にミニシエルターがあってそれが下水を溜めるやつだって言ってた。

クミトリシキの何とかのタイプだって言ってたけど、そのミニシエルターがおかしくなっちゃったんだって、トイレのところにいたおばさんが言ってた。

その臭いだけで吐きそうだ。

とりあえず洗面台に顔を突っ込んで気分が何とか戻ったら顔を上げた。

鏡があるはずだと思ってたけど、私の知ってる私の顔じゃない。酷く頬は痩けてクマができてやつれて、目は充血してるし、唇も赤く腫れ上がってる。

左の鼻の付け根が、この前蹴られた跡かな。カサブタで一応繋がっ

てるみたいだけど、鼻、おかしい。

とりあえず上水管は大丈夫みたいで、蛇口をひねったら水が出てきた。キレイだった。

多分大丈夫。

口をゆすいで戻ったらお祖母ちゃんが何かぶつぶつ呟いていた。

私は気持ち悪くて眠たくつてお母さんの膝枕で眠った。

ガクガクと大きな振動で起きた。朝の10時だった。

先生が私の意識確認をしにくれたらしい。私は今の顔が変なのわかってたから、見られるのが嫌で起き上がって髪を直す振りをした後ろを向いた。

恥ずかしい。私、鏡も全然見てなかったんだ…。先生もこんな気持ち悪い子やだよな。それでもいつものように背中を撫でてくれて嬉しかった。

眠っている間、多分三十分くらい。ずっと振動が続いていたらしい。

電波がだめになっちゃって、外部との交信も取れないらしい。

何とかコンピューターの何かが振動にやられたって。先生が説明してくれたけど、よくわかんなかった。

午前中はそんな風によくわからない大人の言葉が飛んで、外から見ているような感じだった。

振動にも慣れてきて、友達と集まって、詳しく分かる子に大人の話を訳してもらった。

とりあえず、このシエルターは独立国家になったんだよ。外部との連絡手段がなくなったって事は、町長が首相だよ。

そうなのかなあ？僕らで企画して提案して実行できるんだよって。温泉掘ろう！！

なんか盛り上がっちゃった。

美咲ちゃんに顔の相談した。二人で鏡の前に並んだら、美咲ちゃんもやつれてるのに気付かなかったって。

美咲ちゃんは何も言わずにそのままお家に帰っていった。後で覗いて見たら美咲ちゃんのお母さんの手鏡とにらめっこしてた。

午後、今日の運動会は無くなりました。と館内放送が流れた。

九月十四日

混乱はずっと絶え間なく続いている。放送も流れるし、ガヤガヤ声もするし、ドドドドツという音と振動も続いている。

十三日と十四日の境目も曖昧だった。

眠くなって寝ても、ざわめきにすぐ起こされる。

お姉ちゃんのお化粧用の鏡をそっととって覗くと、やっぱり見慣れない自分がいた。

こんなで先生は私の事トクベツに思ってくれるのかな。

はあ。

でも、落ち込んでる暇は無いらしい。

六年生が最上階に集められ、館内放送を流す。

校長先生がマイクで、学校に移って運動会をしますって発表した。

さすがに驚いた。みんなどよめいたけど、竹刀の音が響いて黙った。下の階とかから、ばんざーい！とか、こうしんー！とか聴こえてきた。

先生は続けて、今回は生徒達の安全に配慮して、六年生の鉄棒行進のみの運動会にする事をご承知下さい。と言った。

下の階とかから、ばんざーい！とか、こうしんー！とか聴こえてきた。

最上階の窓から外を見ると、坂の下の方は湖みたいになってた。

そこには幾つかボートが着けていて、用意している人が見えた。

遠くてよく見えないけど、学校のシェルターも見えた。あんなに小

さかったつけ？階段も少なく見える。

最上階から順番にそのボートで人を運んで、また戻って地区毎に運んでを繰り返すらしい。

30人乗りのボートは全部で15コ準備された。

六年生は一番最初に行って、鉄棒の設置と最終練習。

早く行かなきゃ。私達は一斉に階段を掛け降りてボートに飛び乗った。

学校までは15分。入り口の階段を二階まで上るハズが、踊り場にボートを着けたら一つ踊り場を登るだけで入口に着いた。

三時間程で全町民が学校に集まれるらしい。

それまでに練習だ。

校庭は人工芝の上に薄ら水が染みているみたいだ。

下はコンクリートのハズだけど、外は二階まで浸水してるんだから、仕方がないのかな。

設置が終わり、行進の練習に入る。

少しずつ校庭や、校舎の窓、周りのランニングスペースに観客が増えてきた。

緊張感がどんどん増殖して、押し潰されそう。

何もしてないのに涙が出てきそう。

最後まで怒鳴られて殴られて私は足を引きずらないように平気なふりをした。

みんなも口や耳や色んな所から血が出てて酷い怪我だった。血だらけで体操着はボロボロ。

もうすぐ終わるんだ。

その時、大きな振動に身体を取られ、天井がどこかわからなくなつた。

ドドドツツという大きな音が響いて、同じく振動が続いた。

立ってられない程の地震で、窓の外に大きく波打つ影が見えた。

私達は長時間の練習も振動にも慣れてしまっていて、当たり前前に二、三時間を訓練に費やしていた。

強盗防止に移動間の町民の行動は制限され、全町民が学校のシエルターに移動する事になっていた。

だんだんとシエルターはどこも動けない程の超満員に。

本来は低学年の子達が待機するハズの所まで人の塊になった。

知らない間に時間は刻々と過ぎ、最後のボートがシエルターを出発したと放送が流れた直後の事だった。

いよいよ、最後のハジマリダ。と思ったから覚えてる。

大幅な縦揺れと悲鳴の中、先生が駆け寄って来てくれた。私は倒れ込むように先生に飛び付いた。

先生は私を抱き上げたけど、振動で色んな方向にひっくり返りながら校舎の方に連れて行かれた。

お祭りに来る屋台の、バルーンのパンダの中をジャンプしているみたいだった。



階段でも転んだり打ったりしながら、三階の端っこの社会科室に転がり込んだ。

ダンツとドアを締めて窓から校庭をみると、揺れは収まっているようだった。

大きく波打つ黒い影が見える。

せんせ、このまま運動会中止にならないかなあ。中止になったらここに一緒にいてくれる？

ああ、いいよ。腕大丈夫か？さつき芝に擦っただろ。

そう言えば最近身長が伸びたかもしれない。首を乗せられるくらいの高さだった地図の棚、もう余裕で一番上の引き出し覗けるくらいになってる。

体重は体重計がないからわからないけど、身体つきは変わったと思う。

先生、わかってるのかな？

そうだ。

今度下着買う時はお姉ちゃんと一緒のワイヤーが入ったやつにしよう。地震の前に見たお姉ちゃんが新しいのだって見せてくれた、水玉の可愛いプリントのやつとかあ、でも可愛いレースの付いたのもいいなあ。

あゆみちゃん、ワイヤーが入ったブラ着けてるって言ってた。どんなのがいいか相談しようかな。

：

先生、うつむいた顔の鼻先がかっこいい。

そう言えば、私二ヶ月くらい生理来てない。

でもみんなそんな事言ってた。何人か病院にも行つて、初潮すぐで不順になっているんでしょって言われたって。

同じかな。

なんか、先生見てたらドキドキする。

手、触られるの恥ずかしい。

ポーンと校内放送の音が鳴る。町長さんの声だ。喋り方がちょっと独特で怖いけど優しくてすぐわかる。

最終のポーンは桜井三丁目六から十九番までと四丁目の方々を乗せておりました。ポーンは先程の地震で大波がきて、一度波に飲まれましたが発見され、居住シェルターサイドに着岸されております。

ポーンとまた鳴った。

窓越しに大きく波打つ黒い影が見えた。

ざわざわと人の喋る声が聴こえた。学校の周りと校庭、校舎も一階

に。スシヅメジョウタイに人が立っている。

しばらく先生と冬の話をしてた。六年生はスキー授業がないから、今年雪が降ったら、山を越えた隣の街のスキー場に連れてってもらおう約束をした。

靴が窮屈になってきたから、スキー一式買い換えたいな。お姉ちゃんのお古じゃなくて可愛いやつ買ってもらおう。

また、ポーンと放送の音がした。

訓練の時の、低いトーンの鈴木先生の声だった。

六年生、鉄棒行進の準備をして下さい。

ポーン。

私達は無言で教室を出て校庭に向かった。

先生に背中を押され整列した六年生の中に入って行って、位置に着いた。

六年生一同、用意！！

ピッ。ピッ。ピッ。ピッ。ピッ。

心臓が止まりそう。

唾を飲み込む。

賑やかなファンファーレ。

運動会開会の音楽に続いて、最大音量で、音楽が流れ出す。

目を見開いて顎を引き、歩き出す。

鼓動が早過ぎて目の前が真っ白になった。でも、身体は音楽に合わせて訓練の成果を出していたようだ。

二度目の前進が始まった直後。

いきなり、バリバリバリツという大きな音が響き、水が流れ込んできた。

ちょうど見える位置だった。シェルターの出入り口になっている二階の窓。

校門から見て左手の校庭の物置小屋の上から、弾けたようにガラスが割れて波がそのまま流れ込んできて、数人の人を校庭の方に水と一緒に運んできた。

音楽も、私達も止まらない。

訓練の価値をみんなに認めてもらう為に。止まらない。

どんどん校庭は浸水してきた。私達は鉄棒に沿って行進している、  
と言うよりも鉄棒に掴まっている形になってきた。

ここで失敗なんてしない。鉄棒を握る手に力が籠る。

歓声がどんどん大きく激しくなってきた。

観客は興奮からかどんどん押し迫ってきて、歓声で鼓膜が破れそう  
なくらい近付いてきた。

口から溢れそうなくらいのヨダレを飲み込む。音が遠く聴こえる。  
くらくらする。

中間交差から停止した時には腰まで水に浸かりシャワーのように頭  
から水を被っていた。

シャワーの中に混ざり込んでいたガラス片が左目のすぐ脇をかすめ  
た。

校舎の音楽室側のガラスをボートが突き破って侵入してきた。歓声  
と悲鳴が混ざり大混乱している。

淳君との最後の後退交差。いつもここで引っ掛かった。今日は完  
壁に上手く行った。

嬉しくて淳君を見たら目を見開いて、瞬きもせずに真っ直ぐ前を向  
いていた。すぐ私も向き直した。

最後の停止、歓声は最高潮に。

大袈裟に歓声を上げて、ばんざーい！ばんざーい！と一角で始まった。

フィナーレの音楽。シンバルの音が波のように響く。それに合わせて浸水も進む。

音楽に合わせてどんどん列が出来ていく。最後のシンバル。

ババババン！！

酷い歓声と悲鳴と波の音が響く。

わあああつ。

すごい達成感だった。

鼓動が早くなって、涙が溢れてきた。トリハダがたって背筋が寒くなって、身体が震えて少し漏らした。

みんなで抱き合ってはしゃいだ。漏らしちゃったけど、みんな水浸しだったから恥ずかしくなかった。

みんな顔がやつれて酷かった。よく見ると身体つきも、みんな私みたいに変わってる事にも気付いた。背が伸びてたり、少し太った子やすごく痩せた子が居たりした。

足がガクガクしてみんな崩れるように波に身を任せた。

光が見えたと思ったら先生だ。

先生が何か叫びながら手を出してきた。何か言ってる。何？なに？

せんせーおわったよーねーみてたー？きれーだった？ちゃんとできてたでしょー？ねー？すてきだったでしょ？

せんせー

うで、そんなにひっぱったらぬけちゃうよ。

ガバって波がきて、先生はどっかにいっちゃった。

空が見えた。

ハッとした。

シエルターから流れ出たんだ。

辺りは暗くて周りには色んなガレキが浮かんでる。

どっかからばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！って聞こえた。

学校のシエルターが見えた。

光が見えた。また先生だ。よかった。

先生がまだ腕抜こうとしてる。ボートに鼻からぶつかって口の中に  
変な塊と変な味のぬるぬるした感触がした。

塊を吐き出そうとしたら木片に当たって右の口の端が切れた。

ああ、まだ水が流れてくるって思ってたけど、これ雨だ。

すごい雨だな。ばあーって降ってくる。

ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！  
ばんざーい！ばんざーい！わああああ。

ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！  
ばんざーい！ばんざーい！

ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！  
ばんざーい！ばんざーい！わああああ。

遠くで聴こえる。

終わってもこんなに感激できるなんて、なんて素敵な演目をやらせて  
もらったんだろう。

みんなとの協調性も出て、素晴らしい学年だってこれから一生誇り



を持って生きていくんだ。

これからまた中学はみんな同じだから、三年間今日の事を話し続けるのかなあ。

きつと淳君なんかは体育大学からスカウトとかもらったりするんだろうな。野球も上手いし。

美咲ちゃんとかならテニスも習ってるし。姿勢もキレイだし。

私は高校で自慢するんだ。かっこいいんだよーって。すごかったんだよーって。

そうだ、写真とか撮ってくれたのかな？お父さん写真好きだから、撮ってくれたよね。きつと。

みんなに配ってあげよう。毎年見る学校のカメラマンさん居なかったから、写真ない子もいるだろうから。

へへっ。

お母さんありがとー。

お父さんありがとー。

お姉ちゃんありがとー。

お祖母ちゃんありがとー。

先生、ありがとー。

みんなみーんな、だいすきー。

へへっ。

真っ黒い視界の中に、白と青の光が目に入った。

今度はすごい力で水の中から身体が出て、ボートに引き上げられた。

先生だ！！

先生の顔がすごく近付いた。やだなあ。恥ずかしいよ。

やだな、寒い。

あ、全身ずぶ濡れだよ。恥ずかしい。寒い。

遠い所でおーい、おい、おーい、って聴こえたんだけど、もう運動会も終わったし、今朝もあんまり寝てないし、ちよっと寝てもいいですよ。

ちよつとだけ。

また地震？何かドドドドッって音は遠くから聴こえるんだけど、このふわふわして乗り物酔いみたいな感じは初めて。

気持ち悪くなっちゃうよ。

大きな黒い塊が学校のシェルターに襲い掛かって、シェルターがあったハズの所が普通の水面になっていた。

高台の方のシェルター、あんなに小さかったっけ？

先生、先生？せんせー？

頬を撫でてくれた。そんな悲しい顔初めて見たよ。トクベツトクベツ。

九月三十日

隣街の病院で目を覚ました。手を握っていたのは先生だった。眠っていた。

極度の衰弱と栄養失調、パニック障害、鼓膜の機能障害、右足首の複雑骨折。あとは擦り傷や切り傷。目玉にも傷があるらしくて、目を動かしちゃいけないんだって。

TVで世にも悲惨な物語のようにニュースやドキュメンタリー風の番組をやってた。

当初から比較的軽傷だった翔君が県の表彰式に出席していたらしい。

私の分の賞状と楯とメダルは枕元に置いてあった。

数人、体育大学からのスカウトも例年通りあったらしい。

私の家族は、お祖母ちゃんが発見され、後はみんな行方不明だそう  
だ。

葬儀や何か色々やらなきゃいけない事は全て終わったらしい。

先生から話を聴いていると、どんどん孤独感が押し寄せてきて、涙が止まらなかった。

先生、先生、私達の行進見てた？どうだった？

すごかったよ、世界でいちばん最高だった！ほら、表彰だってされてるだろ？みんなが最高だって思ってたんだよ！

ボーッとしていると、ガラスと乱暴にドアが開いて、隣街の親戚の叔父さんが息を切らせて立っていた。

高校二年生になった。

あれから五年。

私は叔父さんの養子になって、中学も、高校も隣街の学校に通った。

叔父さんも叔母さんもすごく優しくて、お兄ちゃんも出来た。

みんなとても愛してくれる。

家族が変わった事も、友達が変わった事も、街がなくなった事も。

すごく悲しかったけど、今は幸せ。

九月十四日。

亡くなった人達への哀悼の意と同窓会を込めて移動した小学校を数人で訪ねた。

住居用シェルターがあつた所だ。

先生も変わらず笑顔だった。あんなにドキドキしてたのに、進学するとあっけらかんと先生の事を忘れたまま毎日過ごした。

あのトクベツトクベツと思っていたのは何だったんだろう。

中学生になってから、部活が忙しくなつて先生には全く会えなくなつたけど、寂しくも何ともなかった。

街は、私達が住んでいた地区はそのまま湖に吸収。日本でも一、二を争う透明度の遺産的なものになっていた。

観光用ボートで横断すると、私の家の屋根や陥没した道路までよく見える。

まだたまに遺体上がるらしい。

この数年で家族は全員遺体として対面した。

友達の葬儀もたまに呼ばれる。先月も行った。

行方不明ではなくなった事に少し無念になった。複雑。

生きているという望みを少しでも持っていたかった。

でも、いつまでも行方がわからないよりもいいのかな。

眺めが全く変わってしまった校舎の窓。

小学生の時にはとてつもなく大きいと思っていた総合公園は、湖の中の小さな島みたいになっていた。

みんなは職員室で話してたけど、私は六年生の教室にいた。

先生が入ってきて、みんなの所には行かないのか？と言って、隣の机に腰掛けた。

先生な、今年の卒業生送り出したら転校しちゃうんだ。ちょっと遠くてね。でもお仕事だから仕方ないんだ。

そっか。

先生、雪、連れてってくれるって言ってたよね。連れてって。

うん。約束しよう。

てを握った。

一月七日

お母さんに、デートしてくるね。と言って、家を出た。

二人で雪山に出掛けた。スキーは持っていない。

手を繋いだ。ドキドキする。

先生の車は雪山に向かう峠道を最速で降りて行った。



- 5 (後書き)

ご愛読ありがとうございました。

本作は 20th・Nov・2011 に私が見た夢がきっかけでした。夢というのは不思議なもので、ストーリーを断片的に覚えているのに話しにしてみると矛盾だらけ。

無意識の中だからこそ私自身の本質が見えてくるのかもしれませんが、ただ、夢の継ぎ目の空白部分を埋めるときに官能的な表現や恋愛関係の情景を描いてしまうのも私の本質かもしれません。

目覚めればありふれた日常。

x o x o

M i m o z ・ K ・ w i t h b e r r y

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6937y/>

---

鉄棒行進

2011年11月27日12時47分発行